



三千化

花鳥表天



三千化

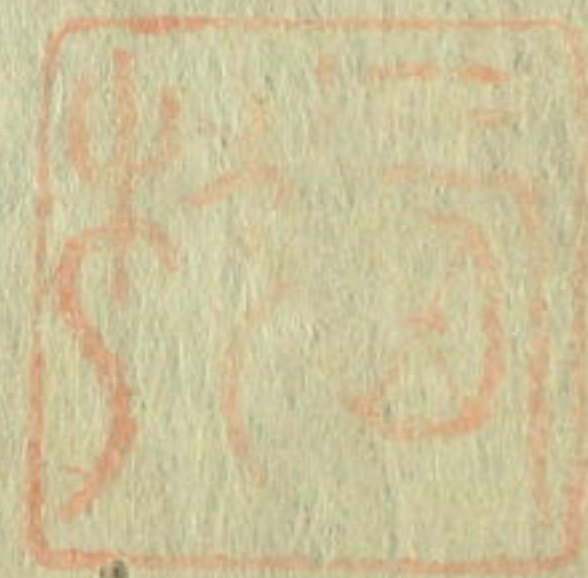
芭蕉翁三十三面忌

口牒

渡部狂編

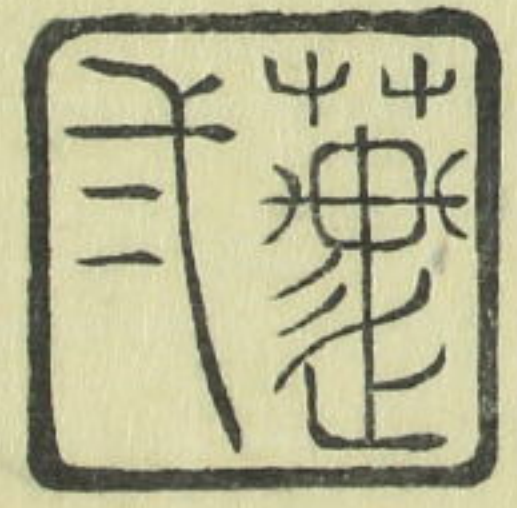
明己年三月十二日於洛東之雙林寺而
 吊先師芭蕉庵之遠忌申度候依之十
 二国四十四所配四季于花鳥之題乞五
 十歌仙之表明春儘其月其日而將供
 三昼夜之香奉調五十卷之歌仙與也
 從東国西国之遠乍隔雲水之便將有

渡部狂編
 芭蕉翁三十三面忌
 三月十二日



蕉門通志之人尔者。尤請一人一章之
 發句。頌某国某所之部。而書記本名俳
 名。題号三千化。而永留祠堂之連名帳。
 百世傳師道之光。則何之作善。可勝此
 事。鼻矣。熟思昔。從木曾寺之七回忌。爲
 手高歸花之千句十三回尔者。供養雙林
 之万句止十七回尔者。造立假名之碑。而
 今也。及三十三回居矣。世已失蕉門之
 古老。而蓮二獨遇。此遠已忘了。則世並取越

五十年忘。而思在。今之五十歌仙陪來
 誠哉。天道之所命者。我且不信受。此月
 矣。哉。人能令奉行其時。給些獅子房
 蓮二。恐惶頓首



享保甲辰孟春如意日

諸国

俳諧御連舟中

卷

七

凡例

一 惣巻頭 遊り上人の所著の定年双林
の十之回忌より二万句の巻にありし
既行の巻をばいりしもの
とされし今や運二の次約より故老の
一巻と濁色してしめれば遠と云ふ
と一也但御書ありし田舎

一 花鳥五十歌仙 ちと十二国四十
芭蕉家一骨肉のりくせし

巻頭あり武城とあり巻軸とあり
視るに生原の猿縁とありし
梅の二巻いえ達の古巻とありし
集巻代と用ひたる道入進退のれ
右とありし今地とありし

一月雪之十五歌仙 ちと通志の人々の
の録ありし今しめしめし
る色けありし我れし
とえりし今しめし

註

二人一旬 ちり他譜の新古と論を
 めいの魂は事より遠きこちのく此果
 ちりこち國もその都とこりて一人
 一唱の名とけりめるよめ我社の餘凡
 の天下よあやなく後子あこ子化七
 十子の凡草の結ぶ教へまも也
 ちり他集事とこ子に名はま
 天地人の之界とあまの一部
 今篇のおいじまも也

雙友林寺園遊

遊行上人

他阿

芭蕉つるあり苔のトあるる世哉
 奥下子のあやここの子のゆき 蓮三
 大書院月の何とそ花も凡牙て 露沾
 山と池探ふ園志つう花 水菴
 假橋のいくつと遊よひそら川 木因
 冬の花咲あつまの星 卯城



来 止 躑 乙



春之部 集句韵 花

梅の香にまよふるのちかき汗 僧 大州

一字の因て月も子令 蓮二

わらうこと杜鰲やうききつて 去来

茶の子とさげの里も林に 智月

像ちとんやうりやうり 丸木橋 尚白

起くとまよふまぢ 猪 正秀

鳥

伊賀上野

さうも葉のふれをや中向山

詠声

さうも梅も世に花あう 蓮二

かきろかに草がうく思位 無人

ちくりの馬の供もわくく 翁

ふの月張るゆも旅り 近之

穂落し秋の風をきり 松涛

花

近江膳所

梅咲やおと半のあゆみ 酒平

やういひむれさしや袖に 蓮三

まの心根のあふしと神あひて 里東

腰けりゆし玉子ゆみ歌 游刀

るあといふとあふみ人連 昌房

盆とあふりに秋を大洗地 怒誰

皇

同大津

よふこころの事やさるねのちりそん
宰院

蕨あゝ日と鳥帽のきき原蓬三

わさけらる柳の帯水さふて 園入

まゆく村のあり 静也 白鳳

空はまの行もささく次そらの
維明

藤の尾上り流の尾上り
利角

花

かかえ令は浅れ川

穂守

はらひもくまうの事とや海業を

四と老心野のあはる白鳥易 蓮三

峯の雪をさふさうや工服くんで 四角

あさらうい帆とえやちりる也 禹川

暦もくまうとや二日さ百の月 希因

折し花けたとやさる水り 金糸

鳥 同野

襟つきに人も海もあや響ウツの色 僧 生可

みおろし屋の春の折枝 蓮二

碧駕の波丁に町も旅も下 侶鶴

きよのちれ地ふふふふは 比業

ら月せぬも藤おし入さすは 車致

せかりのおと袷かきは 左林

花 加賀令沢庵川

重花のめらりと辞と様ふ 山隣

凡鏡もあはるの 山寺 蓮三

夕ひらりや三月のよと候て 知角

銭の唐ふし通司あはるや 沂青

大橋し西風の市此月の乳 観水

お撲しかりて四の 幸哉

正

八

鳥 同所

僧

素然

駒のや富士は一丈と二尺帯
雪と花はくくくくくくくく
信の紅衣はくくくくくくく
まじりくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

花 加賀中松河此

塵生

君の代や里と鳥とる松のむ
蓬のくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

鳥 同野河南

鏡うけこふはくちやんち司 夕市
暮の二の節よあむと味探 蓮二
せんととらよぬ遊の重んた 宇中
村とらとくへ廣い新橋 乃露
やよふのあれもやせられの月 丸上
躑のほほもやんてとある也 昌柯

花 か賀中者

世末の香も春暮りとしはくち 若推
瑠璃の鷓胡の極糸のさ 蓮二
も袴さくねん美たるのまらふて 中睦
ふ繁のるよ河ちよととと 里遊
み月のみとちくねくくあのみ 表風
草の折えよ秋のそと地 二泉

鳥 同大正寺

あはれなりやねのまねや雛子のあ 信 馬泉

くもえ昔々く化 神午 蓮二

紫もたあはく あはれのまね あは 信 貞吉

多平はの多平に 餅 あは 信 角三

法師位 の あは 信 あは 信 虎角

あはれ の あは 信 あは 信 松好

花 越中井波

山吹や秋あはれ あは 信 あは 信 表化

ま木の夏も あは 信 あは 信 蓮二

雪はる あは 信 あは 信 嵐青

百も あは 信 あは 信 乙子

陰の月 あは 信 あは 信 昆凡

色も あは 信 あは 信 鮮和

鳥 同取

西山や鏡とくげく夕や春

林紅

空のみんとうつと雷代

運二

まきし呼こころぬき下

路健

振子もぢげと厚茶一服

右苑

ふふとし風あやむら

荻人

船のたしと小舟おたし

巴箭

花 越中石動

年波のこころやなほ春の心

壺峯

花の鏡の中し入る

運三

あふけりと福豆の神を伝

茂全

城下し伝むいんあ時也

徳亭

く浪のせりしと春の栞の月

可首

柳もくねいあふげしちる

秀鳩

阜 同所

華葉に夕日の中しや輝き

方照

むらりかきと一連の雲 蓮二

世帯をたちのあかきとせむら 澄淵

ぬららぬ花のちり 乙文

月よも須戸のこねとふらと 眉泉

鮎あつとつるり 可水

えく部
花 越中城下

卯のむの急や月のほつら

吾秋

晒をとりよのし 河東 蓮三

海まらるもびうの糸漸く 其凡

り柳の葉もやむ折釘 込及

中あねおけて雲くおほし 今木

流糸らん雪のさき 色氏

阜 同福光

行これ月おのるあり時を
 巴
 うりやふあぢ言とく此花
 蓮三
 挽賣いそゆめ扇風よ獅とがほ
 音吹
 猫もあーこの膝とまれを
 向次
 傘の用こととされへ時より
 呂仙
 了るいよに証の務の垢
 柳士

花 越中高田

富士の雪ゆめと此星の牡丹れ
 東白
 卯月のむも月もふ沼者 蓮二
 傘張し鳥帽子とくこ獅とく今
 虚舟
 鳥あそとらりもぬもと似
 舟油
 峰のやのほもるそりちるん
 為町
 とちくもたうぬいし山神鳴
 五趙

鳥 同氷見

一歩ふり子軍は柳 鶏鼓も

杜亮

柳くゞは流水きらめり 蓮二

輿とちり時をかむらひをたて 未因

砂地の下路のまじり色 功乃

猿猴もあつと月よきうら 海人

山田の事あひ子風よみわれ 佳朴

花 越中富山

ふれむのふさととあよかおはるん 三川

甲冑の束と庭の曲水 蓮二

石盤と琴うといは互平とぬれ下 富州

そよたれは後おまの申 鳥来

片破の月とおまに次あら 白推

お心の秋といつと柳 藤原

鳥 同魚津

九十丸おゆねぬりも水鷗の 倚度

古島のつゝも此風もくすん所 蓮三

木かくれのいづの御行も位あなく 雨村

皆ひりりーととちりやととと 文風

赤いののきらふりのむむむの 貞子

灯とちりちりのあしやうの 磯津

花 越中生地

枝中

悟りと醒て涼りー蓮のくれ

帯の汗と柳を招きけ 蓮三

ゆきととや柳を招きけ 扇之

赤とくちあーあんとて言 柳葉

から柳のいづの月と平らけり 松波

高しーい柳のちりーのき 差五

鳥 同泊

鳥入下れし時お母の足轡に
 松守
 小ゆゑの足のおちむそり橋
 蓮二
 笛の音はいとやうと神はうたへ
 巴人
 鳥わしとまきし筆の影
 里童
 夕月こゝろあふゆと照る
 麻子
 ぬきし筆の影と秋のあや
 草情

花 越後高田

夕白や扇の的よこらの月
 卷耳
 涼の床は此志帆と片帆よ
 蓮二
 うら玉のるを舞よおの月のさ
 井谷
 唐といひはなよちりき
 芦江
 粧との採りきしとくおの花
 以乙
 酔よあふ竹とまのあはく
 巴流

阜 同今町

陸彦

編幅やもあきあきのほろけ
 町るあきあき作广生 蓮二
 ころ月の余花よ中ぬあきあき 過角
 いやらんと結し月よんあき 宿仙
 翠の袖のあきあきと旅人 石人
 こらとまりにきく河の園 丸の

秋之部
 花 越後新浮

七里

瓢々駒しち井よむ火くれ
 月の枝下に一刷毛の園 蓮二
 右酒二杯東城う女房のあて 慈竹
 鬢のころれと抄中々 佐 東百
 神宮の海所りる里と水 修洲
 松よありの角樽より 葉園

鳥 同出雲崎

尾下耻下敷と云わぬ新ふ

文詞

夢を夢中く里へ歸去来

連二

月夜を三月の夜とて

露土

日銅のたのたれあはれ

滌信

雲ふくねを焼て居ひ

万考

市のか買の橋へ流す

滌貫

花 能登七尾

月も咲はしらく事

司懸

春よくとあはれも

連三

女もは宝の市い

五味

あはれ子とて

長羽

材木よはりたる

中葉

ゆり川のあはれ

折鶴箱

註

鳥 同所

丁子やまにるある帆舟 有已

暮雪しゆく八景の秋 蓮三

肌さしき傍りのるし梅干し 和荆

ふりく殿と向ふくまを 舟尾

今年とやうくしにゆく ぬすの月 芝村

消えくちゆくあふぬ 芦村

花 越前之國

葬や浦崎のよはと鳥の皷 昨夜

戎部とてしせしの場七月 蓮三

心ゆくしゆくしゆく 播東

水と代とわらうるを 佐小

手と帯と帯帯ありふ 佐免

日と糸とゆくふ 厩角

鳥 同新保

鴉鴉の石よをよと立返る 乙貴
と并ふまゝの神は物おす 蓮二
妙記う物すは月とひらきた 季和
百身てなふく木花あさひ 可朝
群の音まげんふまゝゆふ也 梨笑
音もちららしく物もちらしく 水竹

花 越前福后

萩もまげ萩も親けは伊勢は家 草吹
七智の子に母の 説は 蓮二
一帯の物よを月のしりし 玄敷
善法の埃よ水の波を 庵白
はち神と常供うまの下の 岩芝
八卦よ人とおとれくら守 山流

阜 同封中

論語よりを濠州のや鶴柳

筑枝

甘藷ハシカはくれ所めを相

蓮二

月の漏るやに不破の草草

梅橘

雪のちらりりかきく元山

柳鼓

糸のけの如く今をといひ

棠木

柿の淡黄く晴る所の風

帰的

花 越前敦賀橋南

東窓

えくく此棒やせらぬ所よ

談糸の少ねの如き百八 蓮二

新末のまぶれも風のたたりん 蓮二

りのまを様と掃と草と 車守

隣より隣もまき女よあつす 拂周

松竹の帯のまきの水ひら 徐来

鳥 同敦賀橋北

木免も鳥帽子あふる世界
人め心乃ちあらよと強
子運に氣を打と被る
ちらよひのひるこく
くらよひのひるこく
辛酉の月卯月朝日
東五
蓮二
紀白
雨揚
梨月
里杏

花 伴勢山田川崎

晩鐘よあふぬく
豊子の庭の帯木よ虎
唐棣よ月下の妻と赤
向へいぬかこのあはれ
あつちの磯と風の掃ち
蛭けりある松丸の
乙由
蓮三
已沈
秋
梅路
里可

皇 同山田園本

山花とを色くあせと輪の山 兔士

山のあふおあや新 蓮三

名月の様おし栲(ちきら)ん 為舟

十しかるの殿(エツホ)うたはく 表如

ふくやうと鷹エツホのたの舞の中 柴葉

よ柄(く)らむ家の三層松 八至

花 伊弉カ素名

暁の向ふの球(カ)るむ美(カ)素名 午潮

そのせりメとああ(カ)サレ 蓮二

むらやま月(カ)るむ常(カ)るむ 徳山

はの(カ)るむ(カ)るむ(カ)るむ 潜柳

汐時のか減(カ)るむとあ(カ)るむ 川北

ありの(カ)るむの栲(カ)るむ(カ)るむ 何有

鳥 同向日市

ふあふ松灯のちや野の鳥 可及

月おふ秋のほくら大各 蓮二
草菊の笛より秋のゆあれて 五
いしー此葉尾の枝ちうる 橙五
あの祝文よるすれも柄の此あり 桐水
みあふこころのりら 又信五 泉次

花 尾張名古屋城南

雲よ穿てちのけめるとみまの 巴静
空の家こもむの又まの藤 蓮三
月の清のさる藤あるとな松下 昇南
いさよこひれし伊達てん松 枝丈
後よる供もつあし津お袋 百糸
おくれあすの火燧く猫 瓦把

阜 同名首屋城東

おほくちや先ゆく宮地を併り 二 涇
あふのあふくはあふれ 蓮三
たのこくくちのあふく 下 巴雀
深おくくちのあふく 下 兼
るあふく子のあふく 下 何文
神樂のあふく 下 試中

冬之部 花 員濃岐阜

茶のむやらの園地より山 二 坊
小まのあふく 下 蓮三
衣張く乳母のあふく 下 童平
おんてあふく 下 梅因
よるの村あふく 下 伯根
おののあふく 下 大毫

鳥 同行り梟

あしととまねとよけみさる 水石

楳もくもくもくもくもくもく 蓮三

お起しおお森の連のまうた 大に

角色山の神のやううん 其指

名月の草にはげしめあはし 呂り

森より漸く廻極の音 糸調

花 濃水方

流の下にまかすあはしはなをむ 里紅

とよとよとよとよとよとよとよ 蓮三

片とけのまかすあはしはなをむ 東泉

膝もくもくもくもくもくもく 齋藤

お神もくもくもくもくもくもく 花

お花もくもくもくもくもくもく 葵の

鳥 同侯

ねらるや 剣の舞のちりちり 角江

鶏鼓くくく十月のむ 蓮三

あふふ 睡の孫と起され 源三

掃ちりり 千梓

いふふ 佐熊

垣の 持雷

花 濃山縣

さる此の 右花

あふふ 蓮三

せと 北航

状と 赤羽

禁牌も 赤

そ 馬岐

鳥 同岩齋

起所の方よりやう水の鴨

二行

曲れしおれ支吾の柳の 蓮二

枝のさそひつこさうにねのめく 荷丁

末のさよとそれ世を静也 猿之

七浦の足に和さしら言を形の有 川布

心いさき擧げ秋の物さを 里郎

花 山城洛陽

柳後園

吾仲

水心の方むれに世のほろけぬ

むも六ひりよき糸のそ 蓮二

の南のふも赤輝し時とわく 范字

奥やうとそれうにまお地 板己

筆と持てお歳の子をまお 子靖

秋のあえんとらあつてあ 吾由

阜 武藏江戸

七段治

百里

頃後ゆらら北園や今一のひきは女

湖水の波の揺る月香 蓮二

松さく枝と花のほらうて 浪水

ふひの綿のほらうき 翠風

旅とや一方のまら侍の身 白雲

肌ちりうま麻のまら秋 楸下

花鳥十句表

後序畧之

白樺老人

今日やさか花は添の白 木因

そらうたの平らと遠く

大は降のそら又そ染のまら

起くあさらの心ありは

は枝よ南天志高く咲こをれ

あうらうとあはるちやを好

一軒とてて押腐と葉と月
菓子と平の心とあり居る
揺束の秋と心をく運二房
いしをとり又しそ心と

花鳥 終

